

学生の地域での学習活動と地域の選定に関する試論 ー学生に期待する学習内容と地域における取組状況との関係

塚本明日香¹⁾

¹⁾ 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜市柳戸1-1）

1. はじめに

筆者は岐阜大学「次世代地域リーダー育成プログラム」に関わって複数の科目を担当し、初級段階と上級段階に分かれているこの教育プログラムにおいて、特に上級段階の科目についての実践分析を2018年に提出した¹⁾。その際は特に講義における重要な構成要素についての分析を行ったのだが、引き続き実践を重ねる中で、地域おこしの進捗状況と学生の取組みを合わせることの難しさを感じるようになってきた。そのため、学生に期待する学びと地域における課題解決の取組み状況とのマッチングについても考察したいと考えた。

そこで本稿では、筆者の担当する科目における学生の学びと地域に期待する役割を整理し、学生による地域活動における地域選びについてのポイントを探ることとする。

2. 担当科目の概要と地域との関わり

2.1. 教育プログラムの概要と担当科目の位置づけ

岐阜大学「次世代地域リーダー育成プログラム」は岐阜大学において全学生を対象に開かれた教育プログラムである。「岐阜を知り、岐阜の課題を見つけ、岐阜の課題解決に向けて貢献できる」人材育成を目指している。初級段階と上級段階に分かれ、初級段階において所定の8単位以上を修得した学生が認定を受けて上級段階科目を受講する。その8単位には必ず実際の地域活動を含んだ科目（地域活動科目群もしくは地域実践科目群）を履修する必要がある。

著者が特に関わっている科目のうち、実際の地域活動を含むのは初級段階の①「教養の宇宙地球科学（ESD入門）」及び「現代環境学（ESD実践研究）」、②「人と自然との関わりから見た岐阜」及び「人と自然の関わりから見た岐阜（実践）」、そして上級段階の③「地域リーダー実践（上級）Ⅰ」及び「地域リーダー実践（上級）Ⅱ」である。2科目ずつ挙げているのは前期と後期でひとつつらなりの科目として捉えられる面も強く、ひとまとめにする方が論じやすいためである。

表1. 担当科目の教育プログラムにおける位置づけと関係地域

番号	科目名	初級／上級	関係地域
①	教養の宇宙地球科学（ESD入門） 現代環境学（ESD実践研究）	初級	岐阜市達目洞
②	人と自然との関わりから見た岐阜 人と自然の関わりから見た岐阜（実践）	初級	岐阜市達目洞等
③	地域リーダー実践（上級）Ⅰ、Ⅱ	上級	郡上市母袋

①は著者の主担当科目、②は主担当の非常勤講師がいる中でのコーディネーター役を担い、③は複数教員で担当するうちの一人である。関わる地域は①と②が岐阜市達目洞、③が郡上市母袋である。

それぞれの科目における地域との関わり方について、まずは順に確認する。

2.2. 初級段階：岐阜市達目洞（だちぼくぼら）との関わり

岐阜市達目洞は2007年に岐阜市の条例で定められた「達目洞ヒメコウホネ特別保全地区」であり、管理団体「達目洞自然の会」が環境保全活動を行っている。1992年に絶滅危惧種であるヒメコウホネの成育が確認されて以来、市民有志による保全活動が行われ、2002年に「達目洞自然の

会」が発足することになった²。毎月の定例活動は「ヒメコウホネの保全、湿地環境の再生・復元、外来植物の除去、達目洞の自然観察会、休耕田でのお米づくり」を主に実施しており、ここにフィールドワークとして①と②の受講生を連れて参加している。

①は前後期とも各3回のフィールドワークを実施し、日程が合わない学生には他地域での取組みを調整することもあるが、基本的には継続して達目洞に関わっている。②では各5回のフィールドワークのうち、1～2回を達目洞の保全活動に当てている。①では継続活動の意義を実感して欲しい、②では岐阜県内の様々な取組みを広く知って欲しい、と考えているため扱いが異なっている。

①ではまず生物多様性の概要を説明し、実際に環境保全活動を行っている現場として達目洞でのフィールドワークを実施する。生物多様性の4つの危機³を題材に3回の座学（話題提供とグループワークで構成）を実施する中で達目洞の取組みも紹介し、初回のフィールドワークはその直後に実施する。座学の話題はその後さまざまに変えていくが、一つの地域に継続して関わることで、理想としての環境保全の理論と、実際にかかる労力がどう折り合えるかを考えることが、達目洞を通して学んでほしいところである。実際に学生のレポートでは「これほど大変だとは思わなかった」という趣旨の記述がよく見られ、後期まで参加した学生の場合は季節変化や年間を通した手入れの必要性に言及するケースもある。

後期の「現代環境学（ESD実践研究）」は前期からの継続受講を促していることと、後期期間を通した調査テーマはチームごとに決めさせていることから、達目洞についてはフィールドワーク前に簡単な説明をする程度にとどめている。

②は地域資源をいかに活用していくか、が主眼の科目であり、達目洞の他に太陽光発電所や円原水源地的の見学なども、座学での当該地域の学習と合わせて実施している。達目洞については、湿地環境保全のために達目洞上方を通る道路の橋脚の構造・工法が工夫されていることも説明しており、個人の活動では届かない規模の内容に関心を持ったレポートもしばしば見られる。

①と②に共通するのは、達目洞について一定程度の説明を行ったうえでフィールドワークを実施しているということである。達目洞は管理団体が方針を決め、ボランティアを募って活動している地域である。先人たちが何を課題とし、どのように解決に取り組んでいるのか、実際にそれにはどのくらいの労力が必要なのか、という点をまずは知るための講義であり、したがってある程度方針や活動方法が確立している地域を扱う必要があるのである。

表2. 2019年度ESD入門の概要

1	ガイダンス	9	フィールドワーク
2	話し合いの練習	10	自然の考え方(3)
3	生物多様性(1)	11	地震と防災
4	フィールドワーク	12	公害の歴史
5	生物多様性(2)	13	科学リテラシー
6	生物多様性(3)	14	フィールドワーク
7	自然の考え方(1)	15	総括
8	自然の考え方(2)		

2.3. 上級段階：郡上市母袋（もたい）との関わり

郡上市母袋は全38世帯の中山間集落で、住民の半数以上が65歳以上という、いわゆる限界集落である。住民団体「母袋わくわく会」が地域おこし活動を行っており、全住民がその会員という体制になっている。「母袋わくわく会」は、地域おこし支援隊の受け入れのために再整備された団体であり、それ以前は住民有志による地域おこし団体が活動をしていた。

2016年秋から地域おこし支援隊の吉田雄輔氏が着任しており、岐阜大学地域協学センターが関わり始めたのも2016年からである⁴。2017年、2018年は吉田氏が主な受け入れ窓口となって連携してきた。吉田氏の任期満了にともない、2019年度からは母袋わくわく会事務局長の野田秀幸氏を岐阜大学地域協学センターの現地コーディネーターに委嘱し、窓口となっていた。

冒頭に述べたように、上級段階科目の実践を重ねる中で、地域おこしの進捗状況と学生の取組みを合わせることの難しさを感じるようになってきたことが大きな執筆動機であるため、一部先の実践報告と重なるところもあるが⁵改めて3年間の関わり方を確認しておく。

③の地域リーダー実践（上級）は、前期（地域リーダー実践（上級）Ⅰ）と後期（地域リーダー実践（上級）Ⅱ）の通年受講を前提とし、1年間を通じて「学生が地域の課題を整理し、着眼点を絞り、その解決に向けた実際の企画を立て、地域との折衝を経て実施する」という内容である。

学生は3〜6人程度のチームを作り、およそ5回程度地域を訪れる。もちろん状況によって回数の変動はあるが、最初の情報収集、第一案の発表と検討、修正案実施に向けた準備、企画実施、最終発表という5つはどういった内容であれ外れにくい。

講義に先駆けて2016年12月にフューチャーセンター⁶を実施し、母袋地区にどんな資源があり、どんな活用ができそうか、ということを学生と住民とで話し合うような機会を設けた⁷。そして2017年度、6人の学生チームは「地域がどうしたいのかが分からない」という課題を導いた。母袋は地域おこしの活動を様々に行っているが、大方針がないのではないかと、という指摘である。

この課題意識がちょうど吉田氏の意識と合致した。吉田氏が地域ビジョンを描こう、という事業に着手し始めた頃であり、先進地域見学、夢語り会、全住民アンケートと進められる活動に平行して学生の取り組めることは何かと考えた結果、「U, Iターン者への個別インタビューの実施」という企画になった。14人の住民へのインタビュー調査とその分析によって、母袋の魅力と課題点を改めて整理したことは、今後の地域を考える上での良い論点整理になったと考えている。また、この時のメンバーは複数人がその後も母袋での行事に個人的・積極的に参加しており、わずかながら交流人口の増加に資することにもなった。

2018年度は先輩の実施したアンケート結果を踏まえて何ができるのかを、4人チームで考えた。同じ頃にわくわく会では母袋に残る伝説についての看板作成を進めており、それを手伝ってほしいという声もあったため、学生企画は最終的に看板7枚中2枚について挿絵のデザインコンテストを実施し、看板設置をイベント化して参加者を募るというものになった。

8月初旬の時点では看板のデザインコンテストだけでなく、重機のペーパードライバーに向けた実地研修という案も出ていたのだが、その後の夏休みで2か月の空白が生じた。限られた時間の中で実施に向けて考えた時、重機研修は具体的な内容を煮詰めるのが難しかったため、デザインコンテストの方に落ち着いた。チラシを作製して高校や大学に送付し、10枚の応募から2枚が選ばれて実際の看板に印刷された。

後の振り返りでは、やむを得ない部分も多く2か月の空白自体は避けられなかったこと、そこで気を切らさないためにはどちらの企画をやるのか方針を決定し、できれば各自に宿題を課した方が良かったという反省になった。また、看板について「地域の人がやりたいと言ったから」という理由が先にたち、自分たちでやるのだという意識を持ちづらい面があった、という声もあった。

直接現地見学を行ったのは講義初期に一回、その後は2つの企画案を持って一部メンバーが相談に行っただけであり、実際に地域の方としっかり接したのは看板設置の前日準備から、という状況であった。地域への愛着形成を望めるような関わり方ではなく、その状況で「地域の課題解決に資する企画を」と要求してもモチベーションが上がらないのは当然なのだろう。その点、教員の側でもっと工夫が必要だったと考えさせられた実践となった。

2019年度の実践は2020年1月現在、全体は完了していないが、主要企画の実施は終わっているもので、そこまでのことを記述する。チームメンバーは当初5人、講義開始早々に1名が履修取り消し、前期期間終了時にもう1名が後期の履修をしないと判断したので、最終的に3人である。

母袋に関する情報提供は、一度の現地訪問と、2017年度のインタビュー結果、地域おこし支援隊の方が実施した全住民調査アンケート結果が主であった。アンケート調査の上位にあげられていた課題のうち「働く場所が不安」という点に注目して企画の模索が始まったが、学生企画で何ができるかという良案はなかなか出なかった。仮にビジネスプランを作ったとして、それを誰に提案するのか？その提案だけで良いのか？（これについては実践が必須の講義である旨を再確認した）できそうな仕事は実際に住民がやっている状況でどうするか、と、見えない出口と情報不足に苦しんだ。

実際に母袋の中で雇用を生んでいる母袋工房、古池組の現在の経営者に話を聞かせていただいたのが7月末である。そこで古池組の方から「保育園ならぬ老育園みたいなのがあったら良いかと、俺は思っているんだ」と言っていたことをきっかけに、「働く場所」以外にも住民の要望として上位にあがっていた「気軽に集える場所が欲しい」という視点が加わった。どのような企画が良いか、を話し合う中で「一緒にものづくりをする」という案が生まれ、「それを通販で売れば副収入にならないか」と発言したメンバーがいたことで流れが決定した。

企画目標は副収入の可能性を探ることと、住民と若者の交流機会の提供となる。作るものを正

月に使える「しめ飾り」に決め、チラシを作って参加を呼びかけた結果、学生参加者が6人（申し込み8人）、母袋住民の参加者はおよそ20人という予想を上回る規模での実施となった。

副収入の検証としては、作成されたしめ飾り13個を、メンバーの一人が自分で使っている通販アプリの個人IDで販売を試み、1個を売ることができた。それをどう考えるかというのは現在話し合っている最中であるから、別に報告の機会を持ちたい。

表3. 地域リーダー実践（上級）母袋チームの企画内容と地域との関わり方

年度	企画内容	母袋地区との関わり方
2017	U, Iターナー者へのインタビュー調査	<ul style="list-style-type: none"> ・初回見学 ・14人の住民へのインタビュー（1人につき2人以上の学生で1～2時間インタビュー） ・母袋での成果発表
2018	史跡看板の挿絵デザインコンテストと看板設置企画	<ul style="list-style-type: none"> ・初回見学 ・企画提案 ・企画実施（前日入りメンバーあり） ・母袋での成果発表
2019	しめ飾りづくり	<ul style="list-style-type: none"> ・初回見学 ・経営者2人へのインタビュー（1人につき全学生で1.5時間程度） ・企画宣伝のための母袋地域行事への参加（1名） ・企画実施（前日入りメンバーあり） ・母袋での成果発表

3. 学生に期待する学びと地域の役割

3.1. 各講義における到達目標

地域で学生とともに活動する場合、しばしば言っていただくのが「若い人が地域のことを考えて関わってくれることが嬉しい」という言葉である。実際にそう捉えてもらっていることを疑ってはいないが、大学がその教育活動の一環として地域と関わるということを、改めて考えたい。

教育活動である以上、学生に学ばせたいねらいがある。もちろん実際の学生の学びは良くも悪くもこちらのねらいを裏切っていくので、あまり固執しても仕方のないことではあるが、教育する側の意図は意図として明らかにしておくべきであろう。

まずは講義のシラバスに記されている「到達目標」を一覧にする（表4）。

表4. 各講義における到達目標

（2019年度シラバスより抜粋、番号表記は重複を避けるために調整した）

番号	科目名	到達目標
①	教養の宇宙地球科学（ESD入門） 現代環境学（ESD実践研究）	【前期】 (1) ESDについて自分なりに整理して説明することができる (2) 複数の考え方を対比して自分の立ち位置を説明することができる 【後期】 (1) 常に目的意識を持って課題に取り組むことができる。 (2) 目的に応じて適切な情報収集と分析を行うことができる。(3) グループワークの中で適切な傾聴と発信をすることができる。
②	人と自然との関わりから見た岐阜 人と自然の関わりから見た岐阜（実践）	【前期】 (1) 岐阜の自然環境に対する基礎的な知識が習得できている (2) 岐阜の自然と人の関わりが理解できている 【後期】 ・岐阜の自然に対する基礎的な知識が習得できている。・岐阜の自然と人の関わりが理解できている。・前述を踏まえ、より主体的に行動ができる。
③	地域リーダー実践（上級）Ⅰ、Ⅱ	【前期・後期共通】 (1) 「岐阜を知り」、「岐阜の課題をみつけ」、「岐阜の課題解決に向けて行動する」能力（地域リテラシー）を

		備えた人材となる。（「課題発見力」、「創造的思考力」、「論理的思考力」）(2)主体的に活動し、地域の人々との協働やコミュニケーションを通して成長し、グローバル化する現代社会の中で活動ができるグローバルな人間となる（「傾聴力」、「発信力」、「状況把握力」）。(3)地域の中でリーダーシップを発揮できる人材ならびにリーダーを支援する人材となる（「計画力」、「実行力」、「管理力」）。
--	--	---

それぞれの科目の内容を想定した言い方であるから、ここだけを抜き出しても分かりにくい部分も多いと思われるが、この中で地域との関わりがどう生きてくるのかを確認したい。

3.2. 初級段階：岐阜市達目洞

①で関わる到達目標は前期「(2)複数の考え方を対比して自分の立ち位置を説明することができる」である。前述の通り、この講義では現代の問題が地球史として見た時にどう見えるのか、という視点提供を主眼にしており、達目洞の活動に継続して関わることで、理想としての環境保全の理論と、実際にかかる労力がどう折り合えるかを考えてほしいと考えている。

②の場合は前後期に共通する「岐阜の自然と人の関わりが理解できている」という項目になる。ほかに見学に行く先もすべて「岐阜の自然と人の関わり」が実際に現れている場所であり、様々な事例を実際に見ることで、自分ならどうするかを考えさせる構成になっている。

①と②に共通するのは、学生が考えるための軸を示す事例の一つとしてフィールドワークを位置づけていることである。つまり、ここでは事例として説明可能なだけの、活動の基本方針を有した地域であることが重要になってくる。

これらの科目は教育プログラムの初級段階に位置づいており、想定する受講生は、まだ複雑な問題に対する多角的な考え方に慣れていない。実際に受講生はほとんどが1年生である。突然自分で考えろというのではなく、「ここではこのように考えて活動している。ではあなたならどう考えるか？」と考え方の例を提示するためのフィールドワークなのである。無用の混乱を避けるためにも、軸のある程度定まった活動を行っている地域が望ましい。

3.3. 上級段階：郡上市母袋

③の到達目標は、教育プログラムの売り文句そのままのような部分もあるため、少し分かりにくい。実際の講義でやっている内容と合わせて整理したい。

塚本ら(2018)の実践分析によれば、この講義での学生の取り組みとして重要になってくるのは「自分たちで課題の整理をすること」と「チームとして意識を共有するために企画書を作成すること」の2点である。そして実際に企画を実施する中での学びが付随する。この文脈において、地域とは課題の提供者である。

したがって、この到達目標に書かれた文言から考え得る地域の役割は、(1)から「学生が解決に向けて行動できるような現実の課題を提供すること」、(2)から「学生の成長を促すような協働やコミュニケーションを行うこと」となる。(3)はチームワークの中で志される内容と考えられるので、地域の役割としては除外される。

つまり、初級段階科目①②における地域の役割が、解答例付きの例題とするなら、上級段階科目③における地域の役割は解答のない演習問題である。解答例を教員や地域の側でいくつか持っていてかまわないが、学生に提示するのは最後の答え合わせの時、ということになる。だからこそ実践分析で報告されているような、こちらの想定を上回る解答が学生によって導かれるようなことも生じる⁸。

先に「地域おこしの進捗状況と学生の取組みを合わせることの難しさを感じるようになってきた」と記したことは、ここに通じる。地域の課題について、それを整理し、解決に向けて行動するという流れは、実際の地域おこし活動と全く軌を一にする。地域おこしが進めば進むほど、地域の側に解答例の用意が増え、学生の自由な解答をサポートすることが難しくなるのである。無論、そこはサポートの方法次第であるし、教員の力量を問われる部分でもある。しかし教員であ

ってもその力量を問われると記さざるを得ない点、「学生の成長を促すような協働やコミュニケーションを行うこと」を、「こうすれば良いのだ」という解答例を多く持っている地域住民にも求めることになるのは、やはり講義の構成として運用の難しさを増す。

母袋の場合、2017年度の学生も指摘した「大方針がない」という課題は、つまり母袋地区が課題提供者としていかような解答でも受け入れ得たということにつながる。しかも地域も無策ではなく、様々な解決策を考えては行動に移していた。地域住民とよそ者の学生という、異なる立場ながらほとんど同条件で思考されるのだから、協働するときに「学生の成長を促すような協働やコミュニケーションを行うこと」は意図せずとも生じる。同じことを住民が考えるとどうなるか、という刺激を学生はふんだんに受けることができたのである。

2017年度の取組みと地域ビジョンの作成によって、母袋地域の課題はかなり分かりやすく整理された。つまり、上級段階科目において学生に期待する「自分たちで課題を整理すること」は地域の手である程度完了したと言えるのである。そしてそれに対する解決策という点でも、数十年に及ぶ住民による取り組みの蓄積がある。個々にはそこまで考え抜かれていなかったかもしれないが、課題が整理された今となってはそれぞれがどの課題に対応したものかが明らかである。

力量不足の批判を甘んじて受ける他ないが、地域ビジョン作成後、上級段階科目で母袋地区を対象としたチームを指導するとき、学生の出す案に対応する取り組みを聞き知っていると、やはり紹介するしかない。それが重なることで学生は、教員か地域が解答を持っていると、この場合には望ましくない安心感を抱きがちになる。そして大きな課題はなかなか打つ手がないから大きな課題なのであり、それに取り組もうとするとどうしても出口が見えずに苦しむという、2019年度の取り組みのようになるのである。副収入という道を見出したのは学生の素晴らしい着眼点だと思うが、このまま上級段階科目として母袋に関わることは屋上屋を架けるか、かなえるべくもない難題に取り組むかということになり、適切な課題設定が極めて難しいことになるだろう。

4. 結論

実践の中で感じた難しさを整理するべく、今回の論考を執筆した。初級段階において、既に軸の固まった地域を事例として紹介し関わることは、教育する側の狙いと合致する。しかし上級段階において、地域の方がしっかりと歩を進めたことで教育環境としては整い過ぎ、学生に適切な課題提示を行えなくなったことが明らかになった。

現在、紹介した事例以外に、母袋での活動を初級段階の中のインターンシップ科目に充てる試みを行っている。それが期待するような学びにつながるかどうかの結果を待って、改めて学生による地域学習と地域による地域おこし活動のバランスについて考察の機会を持ちたい。

注

¹ 塚本明日香・大宮康一・益川浩一「地域での実践的な学びに関する一考察」『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第4号 2018年

² 達目洞自然の会パンフレット『達目洞の自然』達目洞自然の会 2008

³ 環境省公式HP「生物多様性に迫る危機」http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/biodiv_crisis.html 2020.01.11 最終確認

⁴ これ以前にも、別のまちづくり系の講義で学生が個別に関わったり、母袋で実施されているNPOの主催行事に学生チームが参加したりというつながりはあった。

⁵ 2017年度の取組みについては実践報告、塚本他『平成29年度地域リーダー実践（上級）実践報告』岐阜大学地域協学センター2018が発行されている。

⁶ フューチャーセンターとは、この場合岐阜大学地域協学センターが主体で開催している「多様な人々の集う対話の場」のことを示す。

⁷ 岐阜大学地域協学センター『ぎふフューチャーセンター実施報告書 平成28（2016）年度』岐阜大学地域協学センター2017

⁸ 注1の論文では、中一ギャップに注目した郡上市石徹白の取り組み、地元での情報共有不足に注目した中津川市阿木地区でのパンフレット作製が出色のものとして評価されている。